

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：17701

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010 ～ 2011

課題番号：22653100

研究課題名（和文）：新しい教育評価システムの構築－評価の「可視化」と「共有化」－

研究課題名（英文）：Construction of a new educational evaluation system

研究代表者

金子 満 (Kaneko Mitsuru)

鹿児島大学・教育学部・准教授

研究者番号：10513161

研究成果の概要（和文）：

本研究は「我が地域の教育力」の具現化を目指すことを命題としつつ、その手法としての評価活動の重要性を指摘した。その手法として①地域の構成員による地域活動への思いを KJ 法により可視化し、その後シェアエアリング（共有化）を行った。②KJ 法によって地域活動のテーマを焦点化しつつ、テーマに対する現状を個々の構成員の自己評価によって点数化（可視化）し、シェアリング（共有化）させながら、次の具体的な活動の目標を再設定させた。成果として、地域の構成員の主体的な活動が活発に展開することになり、これらの手法がスパイラル的に展開することが最終的に「わが地域の教育力」の具現化へとつながるという結論に至った。

研究成果の概要（英文）：

This study intends to embody “educational function of our community”, and indicates the importance of evaluation activity as method to embody “educational function of our community”. The process of evaluation activity in this study is as follows.

1. Visualization of the thought about community activity of community members by KJ method and sharing of this conclusion
2. Focusing of the subject in community activity by KJ method and sharing of this conclusion
3. Embodiment through scoring of the present situation of each subject by self-evaluation of each community member and sharing of this conclusion
4. Resetting of the goal of next concrete activity

That the activity of community members develops actively is the aggressive result of this study. This study concludes that the spiral development of this evaluation activity connects to the embodiment of “educational function of our community”.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	0	1,200,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
総計	2,200,000	300,000	2,500,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：教育評価、地域の教育力

### 1. 研究開始当初の背景

近年、青少年の凶悪犯罪やいじめ、不登校など、青少年をめぐる諸問題への対策として「地域の教育力の向上」が中教審をはじめ、教育行政機関を中心に提唱されるようになった。「地域の教育力」という言葉は地方自治体や学校など広く使用されるようになるが、「地域の教育力」の定義は、使用される分野や領域によってさまざまであり、概念規定が曖昧である。文部科学省が日本総研に委嘱した「地域の教育力に関する実態調査（平成 18 年）」では、「地域の教育力」を地域の地縁的なつながりと定義し、「地域の教育力の現状・課題、その向上のために必要な要因」について分析を試みており、その結果、地域住民のネットワークの希薄さとそれを強化するための方策という分析と結論が導き出されている。しかし、本来「地域の教育力」とは定型的なものではなく、地域の特性により様々であり、単なるネットワークの強弱ではなく、個および集団としての地域住民が地域に対して働きかける「力」の総体でもある。したがって、その「力」について論じる際には、地域の活動主体ならびに地域住民自らが肌で感じている「我が地域の教育力」ともいうべきものに着目することが極めて重要であると考えられる。すなわち地域住民の共感と同意に基づいた内的評価による「我が地域の教育力」の具現化が求められているのである。

### 2. 研究の目的

前節で述べた「我が地域の教育力」の具現化のために必要なこととして3点が考えられる。第一に、住民自らによって「我が地域の教育力」を導くための、「我が地域の教育

力」とはいかなるものかに関する地域住民による総括的な議論の場の設定である。第二に、地域の様々な諸活動の明確化と地域住民が参画する評価手法の開発である。そして第三に、評価が住民の誰にでも分かりやすくフィードバックされるような評価結果の提示方法の開発である。このように、「我が地域の教育力」の具現化にとって、評価活動は重要な基盤をなすものである。

「我が地域の教育力」の具現化のための評価活動においては、地域住民の共感と同意に基づいた内的評価が求められる。そうした内的評価を具体的に実施ならしめるためには、評価の「可視化」と「共有化」が重要であると考えられる。評価の「可視化」とは、評価結果を視覚的に提示するなど住民に対して分かりやすく結果をフィードバックすることであり、具体的方法として、たとえば花の開花度を用いることなどが挙げられる。ちなみにOECDの幸福度指標（より良い暮らし指標）は、評価結果を、花びらを用いて表している。評価の「共有化」とは、文字通り評価結果を住民全体で共有化することであり、そのことを通して評価活動に住民全員が参加することを目的とするものである。こうした評価活動は、地域住民自らが「受けたい・参画したい」と思えるような評価になると言える。

### 3. 研究の方法

本研究では、分析対象として鹿屋市串良町のまちづくりの核となる市民団体である「串良まちづくり戦略会議（以下戦略会議とする）」における活動を取り上げた。鹿屋市串良町に住む30～40歳代の成年男子15人（2011年12月現在）で構成されている。構

成員の背景は、整備士、建設会社職員、塗装職人、食品販売員等の一般の会社職員、医療関係職員等の団体職員、小学校教員や行政職員等様々である。

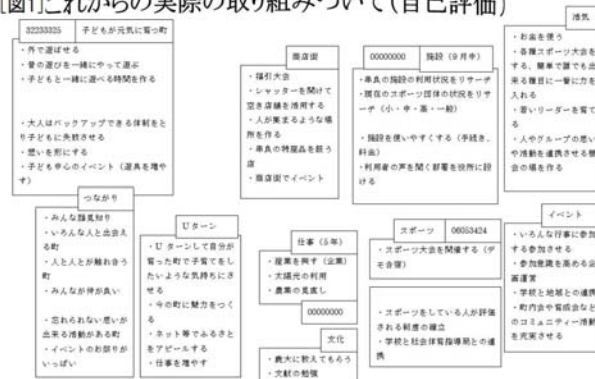
## 1) K J法を活用した評価の「可視化」と「共有化」

川喜田氏が開発したK J法を用いながら、戦略会議のメンバー全員に対し、まず「串良をどのような町にしたいのか」という夢を自由に記述した。その結果、「子どもが元気に育つ町」、「施設」、「商店街」、「活気」、「つながり」、「イベント」、「安心」、「文化」、「仕事」、「Uターン」という11項目に整理された。次にこの11項目のテーマを元に「これが串良の現状だ!」というタイトルでそれぞれ個別のテーマに対する現状や問題点を整理し、問題意識の共有化をおこなった。これらを踏まえ、最後に「これからの実際の取り組みについて」というタイトルで今後、串良町が取り組むべき具体的活動について意見を出し合い、図1のようにまとめた。

そして図1の結果を基に構成メンバーと話し合いを行い、数ある取り組みのなかから、まず戦略会議の優先的な目的の一つである「スポーツ大会の開催（デモ合宿）」、次に戦略会議の設立の根拠となった「友愛の郷の有効利用について」、さらにK J法のなかで比較的高い意識が確認されたテーマである「子どもが元気に育つ町」、最後に長期的に取り組むべきテーマとして「串良町に仕事をうみだす」、という4つのテーマを選定した。そしてこれらのテーマに対する現段階での到達点を10点満点とし、構成メンバーと議論を深め、その点数の根拠や基準について個々の判断をシェアリングしながら点数化を行い、今後の具体的な活動目標を設定した。

その後、前段階での点数を踏まえながら、活動の進行と共に会議を行った時点での到達点を点数化する作業を繰り返した。

【図1】これからの実際の取り組みについて(自己評価)



## 2) インタビュー活用した評価の「可視化」と「共有化」

K J法による評価の「可視化」と「共有化」が主に、構成員メンバー同士の意識や団体として目標のシェアリング機能を重視しているのに対し、インタビューを活用した評価の「可視化」と「共有化」では、個々人に対するインタビューを記録し、確認するという作業を通して過去の自分との意識のシェアリング機能を重視した。

具体的には、K J法の実施と並行しながら、会議の終了時に構成員の一人ひとりに活動を通じた感想という形でインタビュー調査を行なった。それらのインタビューはビデオで録画されており、構成員は前回の自身のコメントを見ながら、それらを踏まえつつ再度インタビューを行なうという作業を繰り返し行なうというものである。

その狙いは、前回のインタビューにより自分の考えを映像によって可視化し、現在の自分と比較しながら成長を確認しつつ、活動の進展と自身の深まりを共有してもらうことにある。すなわち、個々の構成員によるモチベーションの違いに関係なく、自分自身の過去と対面することによって自分の考えの変

化や成長を可視化し確認することが本取り組みの目的である。

#### 4. 研究成果

(1) K J法を活用した評価の「可視化」と「共有化」による成果

##### ①テーマ1：スポーツ大会の開催

串良町はスポーツの盛んな町であり、戦略会議が構成される過程においてもスポーツ大会への取り組みが行なわれていた点、さらには、K J法が実施された時点ですでにスポーツ合宿の日程が決まっていた点、さらには、取り組むべき活動が「スポーツ大会を開催する」、「デモ合宿を成功させる」と明確であった点が同テーマ選定の理由である。

同テーマは10点満点中6点と高い点数として評価された、また、イベントの日時もしっかりしていたため、活動目標の設定も容易く、構成員全員がやるべきことをお互い確認し、シェアしながら進行していった。その結果、点数も順当に右肩上がりでも評価され、合宿の終了とともに10満点の評価を受けた。

##### ②テーマ2：友愛の郷の有効利用について

鹿屋市が管理する社会福祉施設「友愛の郷」を同戦略会議が譲り受け、スポーツ合宿ができる施設として運営しようという考えが発端となっている。K J法を実施した時点では、まだその施設を訪れていないメンバーがいた点も踏まえ、10点満点中2点という低い評価となったが、行政の施設を市民が主体的に有効活用するという点においての行政側の期待が高く、また戦略会議においても宿泊施設として利用できる可能性が高い同施設に対する期待が高い状態であった。その後、施設の有効活用のためには、利用する側のニーズを把握する必要があるという問題意識の基、活用を希望する団体への連絡や、市内のイベントの再調査等が実施された。

しかし、活動の目標を設定するものの、活動の進行とともに公共施設の管理および運営の難しさが構成メンバー内でシェアリングされ、活動目標の再設定が繰り返されることにより、評価も3点という低い水準で横ばいの状態となった。特に、施設の維持管理費の捻出、利用団体の確保、運営するスタッフの雇用等、活動を進めれば進めるほど、クリアしなければならぬ問題が次々と顕在化し、点数どころか、当初の実現期間1年という計画そのものへの見直しが必要という結果となった。この時点で構成メンバーは、プランニングの甘さや活動の難しさについての共有化が図られると同時に、行政機関との連携の重要性について改めて認識した結果となった。

##### ③テーマ3：子どもが元気に育つ町

戦略会議の成立過程において宿泊施設に関するテーマが中心的であったにもかかわらず、「串良をどのような町にしたいのか」という問いに対し、高い関心が示されたテーマが「子どもが元気に育つ町」であった。もともと構成メンバーは、地域においてPTAの役員をしていたり、子ども会に関わっていたり子どもに関する活動を多岐にわたって行っており、まちづくりという点において子どもに対する関心が高かった点が要因として考察される。

普段漠然と子どもと接していた点も踏まえ、K J法のスタート段階では10点満点中3点という評価であったが、子どもが元気になるような取り組みを行なうという明確な問題意識が構成員に形成されたため、手作りの竹馬で遊ぶといった伝承遊びやキャンプや山登り等、体験活動を中心に、積極的な活動が実施され、構成員全員が何らかの形で地域の子どものかかわりを持ち、共に活動実績を残したという点で、評価も当初の3点から右

肩上がりとなり、夏休みの終了後の評価においては、10点満点が構成員の満場一致で決定された。

#### ④テーマ4：串良に仕事をうみだす

KJ法実施の際、「串良に仕事をうみだす」というテーマは、中心的な話題とはならなかったものの、まちづくりの長期的なビジョンとして雇用を創出することの重要性が構成員から指摘され、また他のテーマが比較的短期のものが多かった点も踏まえ、じっくりと腰を据えて活動を展開するという文脈から最後のテーマとして設定された。そのため、自己評価も大変厳しいものとなり、構成員のすべてが最低点の0点を付けた。その後、仕事を生み出すという視点から個々の活動を見直そうという問題意識が共有化され、前述したスポーツ合宿の活動から、地域住民へ利益の還元が行なわれたりしたため、0点から2点へと評価を上げた。しかし、期待されていた「友愛の郷」の事業がなかなか進展せず、また地域雇用の難しさに対する意識のシェアが行なわれたため、現段階における最終的評価は、そのまま2点で推移した。ただし本テーマは設定当初から5年というように長い期間で設定されていたこともあり、必ずしも右肩かがりにならない評価、継続させようとする活動の重要性が改めてシェアされる結果となった。

### (2) インタビュー活用した評価の「可視化」と「共有化」による成果

#### ①インタビュー記録(平成23年6月21日)

戦略会議を中心に引っ張ってきたリーダー、まちづくりに熱意を持っている者、とりあえず誘われて参加した人等、それぞれのモチベーションの違いがコメントに現れた。

#### ②インタビュー記録(平成23年8月22日)

具体的な取り組みとしてスポーツ大会の開催(デモ合宿)が迫っていたこともあり、ほとんどの参加者から「楽しみ」というキーワードが共通して語られるようになった。また、これまで比較的傍観的な意見を持っていた構成員から「自覚」という言葉が発せられるようになり、前回に比べ、主体的な発言が述べられている。

#### ③インタビュー記録(平成23年10月7日)

戦略会議の場において発言があまり積極的でなかった参加者が活動を通して主体的かつ具体的な発言をするようになった。一方、初期から活動を先導してきた参加者は、活動する中での難しさや、困難である点を感じ始めている。また全体的な視野にたった意見を構成員が述べるようになった。

### (3) 成果のまとめ

本研究は「我が地域の教育力」の具現化を目指すことを命題としながらも、その手法としての評価活動の重要を指摘するに留まっている点でいまだ発展途上の研究であるといえる。しかし、評価活動における「可視化」と「共有化」がいかにか地域の構成員の主体的な活動につながっていくかというダイナミズムを明らかにした研究であり、本研究の着眼点や分析の手法は最終的に「我が地域の教育力」の具現化につながるものであると確信している。以下では、本研究のまとめとして、KJ法及びインタビュー法を用いた評価の「可視化」と「共有化」の意義について整理する。

まず、KJ法を活用し、串良町の将来像をイメージし、その課題を焦点化させ、具体的な活動について考察するという手法により、普段の会話で整理されなかった思いや考え

が、カラフルな付箋紙と共に、具体的な文字として表現され、他者の考えと交わり、そして分類され一つの形として可視化されたことにより、構成員全員に共有化されることとなった。この手法で作成された模造紙は、活動の拠点施設に掲示され、常に構成員の目に触れるところに貼られており、常時確認できるようにになっている。また具体的なテーマを焦点化させ、10点満点を到達点とし、現状を個々の構成員の自己評価によって可視化し、その点数の意義を構成員同士でシェアリングし、まとめる作業をとおして共有化されることにより、次回の活動内容の決定と目標地の設定という主体的かつ具体的な活動が展開している点が指摘される。さらに地域における構成員の個別の活動や体験が有機的な連携を持つようになり、それらがフィードバックされることにより、広い視野にたった活動へのイメージが共有化されている点が窺える。

また、インタビュー法を活用することにより、自身の成長を可視化し、その結果、より系統立てた取り組みへのイメージが可能となった点や活動を先導してきた構成員と新しく参加した構成員の発達や成長の過程の違いや、活動を継続していくことによる悩みや課題発見のプロセスが構成員自身のみならず、他の構成員とも共有することが出来る点が指摘される。

「我が地域の教育力」とは、地域の諸活動を通して、個々人の成長を本人だけでなく、周りの人たちと共に確認（可視化）し、そして共感（共有化）しながら、共に影響を与え合いつつ構成されていくものであると考える。そこには、知識のあるものや経験のあるものから無いものへの伝達や単純な右肩上がりの成長・発展だけでなく、継続し、共に成長し、時には維持していくものもあること

を再確認しながら形成されていくものではないかと考察する。本研究は、そのための手法に関する分析であったといえる。

## 5. 主な発表論文等

[学会発表] (計2件)

(1) 金子満、江頭智宏「評価の可視化と共有化を核とした地域の教育力の再生に関する研究」九州教育学会第63回大会、2011年12月10日

(2) 金子満、江頭智宏、高谷哲也「自治体における評価の現状と課題」九州教育学会第62回大会、2010年12月11日

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

金子 満

鹿児島大学・教育学部・准教授

研究者番号：10513161

(2) 研究分担者

高谷 哲也

鹿児島大学・教育学部・講師

研究者番号：00464595

江頭 智宏

鹿児島大学・教育学部・准教授

研究者番号：40403927

和田 七洋

鹿児島大学・教育学部・准教授

研究者番号：30513155

